中村俊定文庫
文庫 18
42
1

やまとうたの俳諧の心をせ
ばめたる歌ともちいたしこれらは
あふ毎よりのうつりの記事
せばたるひとそくのう
ちくさのうつりをもてあそび待
凡俳諧の連義を思ふ
詩歌連句はいかゝ
あるゆゑの信仰よりこと大
なることを極めるくるしみ也
まるゆゑやかゝる人耳ハ
ようやうにして和歌也
とかうるものつゝかね

かまくら殿の御酔のさまをつくられた
るの云捨ものはすさびてき
異をとゝうはとゝみえんこう
言に又或童子はいたく笑
わかはうの一初学よりはんろう
さき物やうはいたくはいあるほど
のうすをを書あつまとへ天
ようよりくすあるされ
きとゝうてさうあるあん
やんの水井清きを方ゆいう記
なうもへさゝ云乃ものあるを
かきとわをへい家上川のを

いあるのいうかてあれと変
ゆあひうれともはまて志ろ
ちあるを拾うまりうりあを月
志都の助かをもあんとあを
のはきくゝかを毛筆そ記
見うわをかをへられて
清き紙を渡うとうそれ
一切のうのいあくきられとを
ゆせをうさうるのをを知う
毋うく筆をしはりくうを夏
のを天乃やうめをもおそう
うりき其上都ハ月ろ川ら

田舎にはかりしとやはかりしとも
きかぬ所なしの野辺の草の道とて
の道とてなほ思ふるを
きはたはきはたらいきるうの
心ろきかきもてそ
あらもれとこと事あり
素らい素い梅の花の花英物
白梅のうきもはかりたるも
いとあはれくそあれやう
あくあてあるはあ
はるはあるはあ
きんはくのもも胡蝶の詩を

そやはなとそはかはるるきは
がけ水風海棠章夷の盛りをく
て書きかの折をもやとあ
はきの夏の源
あ夏の人まそ
つ艶をいふ
をもむ
永海よりとと
ひうと或はひう
るなとのあれ
まうまふ
挿胡桃の指を思ひあ

霞をけき花の煙をんてハ拾撥
鶯の鳴聞ハ藤のとの紀をきよ人
皆ん〻をこと〻ハ海もうれ
野のくさま猶ゆく〻ハんすゝ年此
くゝ歌をこ〻ハ〻と〻書そ〻ぬ
世のうゝひあらきかくこそ
抑ハ変出集ゝ〻〻〻〻〻〻
先句抑のうれ〻〻〻〻〻〻
まゝ歌ハ〻〻〻〻〻〻
同連歌の詞も追加〻〻〻〻
今めゝ〻〻〻〻〻〻
詞ハ俳諧の格〻〻〻〻〻〻

やあ〻ぬゝ〻〻〻〻〻〻
はぐ〻〻〻〻〻〻
付合ゆゆ〻〻〻〻〻〻
皆用捨〻〻〻〻〻〻
付句ハ大子集の〻〻〻〻〻〻
きゝせる〻〻〻〻〻〻
なる〻〻〻〻〻〻
人員〻〻〻〻〻〻
〻〻〻〻〻〻
より〻〻〻〻〻〻
夢にハけき〻〻〻〻〻〻
〻〻〻〻〻〻

事は千里を去るとも云ふ
こゝは寛永十四丁丑年の
毛を吹て疵を求めんす
こうひ形しをとゝく愛白乃
數の引過る庵のあるにひと
もゝ計りとゝへ孤住つき閑
和のゝ月ゝ月ゝ小同ゝ
朧月後のゝ月ゝ大むも
光ともゝ

毛吹草題目録

春部

元日　春菜
子日　初寅
左義長　初午
梅　鶯
霞　殘雪
春氷　雲雨
木目　柳
春草　芽
土筆　蕨
若月　椿

桃花　杏子
花　梨
小米花　海棠
沈丁花　躑躅
藤　款冬
蝶　樝子
蛙　帰鴈
雉子　雲雀
鶯　春郭公
桜鯛 付 桜貝 桜蝦　若鮎
若菊　永日
曲水宴　三月盡
雜春

毛吹草巻第一

〇一 連歌付誹諧付差別の事 名ニ云

てにをはも継ちからにて付候
ゆは 指とさして 小指 爪
爪を付るハ連歌付 好碁 蟷螂
若細工ハ誹諧付也又 打と
さして 碁 碁盤 蜘 蜘ハ連歌
付 双六 双六 賽西多かそひ
といふハ付なり

一 云成付ハ 猿とさして 紅葉
桜 蝶を付るハ連歌付 嵐
登人 川遊ハ誹諧付なり

一 云のと定め成ハ 鶯 樵夫 舟
或連歌の付 馬子 巡礼
比丘尼 巫子抔といへるハいつれも道
地誹諧にハ嫌ふ事なとに 梅
卯花 若草なと連歌の付 木槿
匹夫 小角豆抔いへるハいつれも文
字なるゆへと云事 苔 菅 田ど
付るハ連歌 たもと 一ツ葉
蠣 蚫抔誹諧付として好ませ
いとて連歌乃付合を嫌ふと
いふにはあらす先一躰をい
ふなし

一 一句連歌めきて誹言に流れたり

ふる時は 鶯とんて
花をなかめる 月乃栄ゆる
物の色に 風ふむそて
此等はことばを流もくさる人
の云ふや 将文漢言後家言
ことのこ

一 古き集其詞書あまた當代
宗祇句流々誹言多
しかと人の聞る八百韻
連歌にもちひさる事ハ誌る
をいふいなるんと云り

一 百韻連歌の時も誹諧体と
ておくまことよしまつては

池潛もまゐりあへり
あこがれのいさましかりけん
きてかのいさましかりしかや
さきさきへ座しうつしあやうき
ものゝ付きうつ面さうこのとそ
無所の席たいとの桂小三郎
塙の事ども云人きさやう
乃るまいひとてなりすへ
いろく情実あり去付ゆうゆき
新論をもつてきて学さ地
かゝる事ありとこそ
桂桂若ゆ逝年それく
乃松久ゝ面一日お清水新地

入ち祇町墨付名或い墨拓本
ひかなわけのよう切き伝
法ゐ分てていまゝてもりあ
あらゆるを云あるいく
伯川恩惟一清水へ
池潛ゐ事千張又毋ゝ
百といへるゆへ内わゝ
まゝ方郷の池潛い貧かゝ
云人ゝ孫ゝ但無
きいゆも思ゐ有ゐ事
ゐやかゝ内ゝ其事所ゐ
他の名理ゆ学ゝ大池潛
とあれい拓ゝよいひけん

こすもの迄ものうらみ人
乃白をまれく唐紙きく
侍迄へてゆをとけをといい
めーてんのうさみみ迄ものうを
一白瀧花迄ものとも
をきいまう句一町ものうち
一寸ひハ瀧潜めんを深へ
てこうをきなもあらされは
つをれるかすあるつりうら
ゆくるを迄ものとみくさうち
又負迄ものハ竹をを浮く
ナンさまうつ方ものや瀧はは
陸絵のハ陸地なるをを絵ものを

迄ものハ竹をのうををくいあ
連歌をんはるうへの瀧潜ら
夏海をうをうをうやうまやうん
やうををれハ用ものをを云紫
作ををれの中ををあうをいき
なををハ耳をれうをいをう
耳をれぬをとりて大うをを知
ををををすをを白作出を作
らは出をを迄白の侍を絵
吟味をへ一をたーなん
うををへををををあをを
うををいをり花の作をを
あをををへ芳絵郭公

ゆひろへて其流の詞をとらんか
ともんのひとりあるハ論をし
又制の詞ともゑらひハしとも也
笑ら話を除きさる人のさん乃
まさうつりさをまむるか
ひとしと出ん甚大さよ秘也
まへりこしたいかし題うう
志あし並ふろ一集の内又
當代まてもんさし婦うきん
乃秀逸の句なりとまろうち
未しまてさも出しもなへき抱
り文かもかうきハ代らってか
しらし訛をまさとうまうるを

あやまりなまりて世の人ハよし
とはやまし　同上とる句
夜山ハ月乃葉ある新樹哉
と云句ハおのるもゆうるよ
凡る花や月葉月のむ揺
耳ハびくあ川さがやや附る
右同
笑ると見かくきくや耳畏號
其言てと天ハ札う川要新哉
名月と天ハ札う川出ん哉
花くハ難波乃梅をまねかれ
出んをやきいろはハまきれなかれ
鹿もちをつきて娘ふせいぶれ
おりなとこ鹿もち月の縁哉

水仙ちりてまろれめ水仙
ちりのれてなるれちりきれ水仙
ゑ拍乃きるゑ乃ん志の水仙
玉ゑ拍いさ〻〻のとろゑ水
除よゑてゑ花ゑる人や羽ぬけ
ゑるや拍よとまれい羽ぬ走る
花ゑけい横乃ゑ横乃ゑ鬼蕨
鬼百合ハ横乃ゑきゑゑ者ゑ
醍醐味やむ竹の子水ゑ
醍醐味と知やまる竹盛ゑれ
みゑ蛇やゑと山けゑ蛇の志ん
雪花乃志ん乃ゑやいそん留立留
いふゑ乃ゑ竹ゑ乃ゑ竹ゑ

花や根よさゝゝ乃ゑの者
田ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ
○真風雪の乃ゑ乃ゑ乃ゑ
ゑゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ
波ゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ
風乃秋の志ゑ者ゑ者ゑ
風の秋を鈍ゑ者ゑ者ゑ
ゑゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ
○清菊の分ゑ者ゑ者ゑ
ゑゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ
花の良いと者ゑ者ゑ者ゑ
めゑ者ゑ者ゑ者ゑ者ゑ
乃ゑ物ゑ者ゑ者ゑ者ゑ

がおよそ出侍る句もいふべし
始めたる句は便乃事也
　花みまでは其ゆへ志んの涼しかれ
未花なきは只しんの涼しかれ
今は秋のかぜとや涼しき時分
きのふ帰や暮る汁まで涼部云
　六月の扇とつかふすめる句
涼しさもぬくる扇乃まよめる句
右乃三隻六句ハ秋も調もひとつ
かりしかも心替あるよいつきも
昇侍る宗祇の句は花み迄ハ
涼しさも家そといふまや涼の
句ハちる扇をかんで仕ちたる也

されども志んといふ文字ハ秋
の句なをや涼しと云まです
の句あり是は浅はしんの涼
くり暮るといふ○とそれとかく
まずしきかて帰やの句も
其のときの残せんに云たる也
京あれ程都よりちるゝ句在
りし名別ありきて帰や
と云みてくゝ覚える文扇
の句六月のいとわの事在
扇とつかも云事といふん
撰扇のえんようまめうといふ
思かれめもぬくるとまき句ハ

かまあけちらハさ扇の風せん
ぬ　けるわひさ涼しさも
うするといんを色もうみぬ
乃えんよぬるといいてりいま
ゐんさけ　ちゑ　なうり河の
ゆくくんまわさしくおと
と古人の句　絵ひ

戸十一

心放伊都。或遠秋の書よ云秀句ハ和哥の素作り
寄とうの重事
をとりて
他ハ　ゐおは
しかるべくと
云ゐゐ
（水仙ゐり）

て斉きをを俳ハかなハ
ゆるく　但戒力ゐるく毎と
あのむをそうなさたひ一句を
うるをてもおるくんのゐよい

きまゐ白ハむのきくんよりつて
寿和哥ゐきなをてうらくれ迦
仏婚初ゐ乃雪ハ秀句ゐと作
ゆるくたゐ和のおくんのうつわ
作くゐ白ちるもゆりを一句の
乃理を作くさる地とそきう
と御婚を和のゆる不
ちきを初の作くきとの新
賞して歌ゐをさる白
名ゐ　おくてるいを清ゐ
ゆるうすイ来ゐ月乃なぬ船
三ヶ月やつるいう酒よりひの経
月をかきてりゐや潮の車ひ

秋乃夜やあらしきこえぬ御
月はあけぬ戸ぐちるやさゝ[illegible]
色うしんの出る月光伊勢山
雲やこけらの[illegible]る月
大原はさぶもち月の姫小玄
まぶかの[illegible]あげ[illegible]
戸十二
一 ゆのえんとまちるてんのかつき白
ん和もえうすかりそかに
ぶる九門乃ちんや二ヨ
落ちることぬい柿のてけ
おしめるにまいる月
戸十三
一 云かけをあきてんの淺き白
ぶこうへまきのれのら[illegible]

から
味乃くの紅ぬやかりてまく風
澄居てしらの夜の月かへ
ぶりぬまとまそかりもう
すさひて月もあ[illegible]
吹ちる風あらきれ見さ
戸十四
一 立入をかとうてんの淺き白
なるまのぬかをなりうう菓
ぶ[illegible]
戸十五
一 須を新てんあさき白
[illegible]乃宿ようを[illegible]
すこれ
[illegible]
[illegible]

から風の名よ遠くうるおまき糸

廿十六

一 玄蕃の御通りて其西方に雲白

山の名や云りてきこゆるさ

なりて人よりもらはるるやへさと

垂く成花やゆゆしきあるを子

廿十七

一 ちりぬるさるあるもこしもれ

四方よ春きこゆる金見よ春来

はく落も神ひえを雲の吹ちる

さはぬ成て垂成りけりたくりか

一番小人の名花乃まくれ

さけと見ぬ小春の色乃後

嵐、そよこれ柳引雲うれ

新小袖乃中垣

廿十九

一 思惟ゆゆしさ白

うら浦が彩るあれ小春郎月

立くるや足り引かけりの手

花成風霜なすすれ福

月夜雨や兵そ雨のこの海

小春乃中央とも文敬さ

廿十八

雲白ちるひとをけ彩雪

廿十六

一 玄蕃

親小袖乃契八男子の部 云

立雪も一口に声ふ浦ふ

たすそそふひの八幡の巻

天乃戸の月宮なん東の月

カ月一 雪ゆゆしさ白

廿十九

一 思惟ゆゆしさ白

うら浦が彩るあれ小春郎月

立くるや足り引かけりの手

花成風霜なすすれ福

月夜雨や兵そ雨のこの海

小春乃中央とも文敬さ

第二十
一 支離之躰
手織る時や音やうのよ初心歟
春くれし月もえかも花結まれ
○家やつんけるそはとしの関守

第二十一
一 病雅之句
夏乃目やも飛節いるや夕日影
女花てふとする池のえよ哉
山口ふちりし女ばはハッけりつれ
そうに至ニ詩ハまれ目のめいお哉
月見目やや肉魚乃世れ立くミ哉

第二十二
一 姿詞下劣之句
こねんとてさぬ業る芒葉めれ
風や桐壌わりはゆりれの糸柳

まみ作せり柳乃蛙そこぬらす
汁なせん光えんわれはしらは
いさうりや月さき酒の香の哉
くひさうてきひうる飾の料理哉
みそ萩乃花のまうかハいうさ哉
萩乃今折るや翁れずかくそ
鐘霊にはりけ落葉ハ英子哉

第二十三
一 詞平懐之句
永元にハ多ひりるんとおふれ
山ちる花を行むやまてん哉
ひりめる宮れ庵や恋ならし

第二十四
一 放埒之句
山口や大きおる川の鯖くらひ
（山口やの句）前長か長ホとやらかせし句く長頭九長共をかけられて人の口に住り はつかいの本作をしとはある人も付る かーもーは撰者の偏執して卸し示た かへおわうれり）

ちご
咒梅花をみてもやがてうぐ
風のもやうをうちらしたる梅のこ
ぢもなりたりける菓子

月二十五
一詔こゝ
重陽の新菊まさき梅花
数なくいろの海かいの金襴
ゆ堤や法人今月の財布
雨天ゆとあ鄭城新菊花
義三月山三乃乃ゝ色
宝月ゆ三て発願を破れ
雲程乃をけるを月草
乃ゆ乃ゆ乃ゆ方ゆ女子
腹ゆひとも堤やゝめ腹

月二十六
一詔桃猪ゆゝ乃ゝ
数多て苔花とゆ梅れ
大雪ゆ梅ゝる枝も
座ゆいゝる花乃嵐八月数ゝ
ゆゝゆゝも竜乃ゆゝ新ゆ
とと吹と竜ゆあゝる心風ゆ
苔ゆ花乃ゆゝる雪もれ
ゆゝ乃月八ゝ宮むのゝゆ
右ゝ白ゝゝん野梅とゝを
ちゝ数やゝにゝゝ梅乃花
ゆゝひ大宮ゆとゝゝゝ宮
ゆけゝとゝひ春ゆゝを龍
ゝゝとゝひ花の宮とゝゝ

花乃時やさしいひそとやくとあるに
句なくも花にさそふな嵐哉
黄昏ともをまして咲と云
咲かき月ハ雪花とある哉
てらし貌や嵐といひん雲魄
あまいらく落書なるべし

第二十七日
一 さりられと一撥(がい)かハきへりぬ
一輯又瀬綾のえんまして思入乃
まで専するる
見えしもしみさめ風吹ぬや桜花
朧(おぼろ)月夜もかくれぬものさらぬ
花乃泪も泪なりとうたふ在
むし魚や夜乃あいさ所時節

第二十八日
一 古き詞に云動ハ縷嬉と、
名とのこくしなのむ連ハかくき
かるまにとて文中やまさ天り
猫そ演ての趣へきん哉
めくし海に毎なるてもまるる
あるりのさるりをたくむこたん
されハ動ハ中心の色を翻人の
中傍待る
書と折りなて夜と思定、
是ハ琴あるめて封翁が年始
の扇に生の時ある長歌(けい)よの翁
はま書けとみまのなるべし
牡丹を人ハ寄ふ連ますに云哉て

花も中山とやいへるよ
無分別なるわさなと云ふもの
花よいふくまいと云面影(おもかげ)に
折ふし枝の疵(きず)をあくると刀にて咎る
花のとかくするまなるへし
月雲の園の盤をいむ風情
あまくみる中より一夜ハ花さくろ
月中ん前つまや
うへハ下きくハ上まや花ぬれん
花よは女性のまさるすまひの曲
花のまたをおもふにし本意なれとも道
又まほるへの数ニ二円そ
春より柳乃猶みあつる

ひさかたはかしらまかひの庵
月中んまつまや
日なれものゝにのひろさよ
太半を出しめてや春つらん
君の歌と文字を添て遺とふ
右よ同
丹二十九
二 人名の多き懐紙を廻帳(くわいちやう)
誹諧とて前代より編続へ
よし次の付句とをうこまふ
物とれ去らハ人名をおりて之
あるのなるれ句作よりり
てこやむかし通るとましか
あしらへる花くはりしなれ

只無筆の者はあんどかきくどき
障子にも紙をはりあけれど
母にも深みて伝武士
無縁になりぬるの谷
右に白をいひ侍らめ男也
四よ紙して古来随筆を
紙をとるを率にせよといへ
算をしも紙をはしや筆硯
と待るに不堪の人いかにすとも
手本も是にも筆まくりも紙
されけんとかんしへ行かる
紙白の道具ありけるに成る
一句もよまで書く筆を継ぐ

右の白は筆一文をとまりかくよ
もちゐるく紙とまかつし紙を
すてても若きまのしかりぬよ
物数乃をき白は紙くは用捨
乃曲有へしめ此のみひき
大概かくあらはしとらう
同口鼻耳も皆あをて
すなはち以中をよく見ても別かう
円すら鼻をむ口を添えこれ
格やきよく鯛出歯をゆゑ味かて
鶏蟷螂も穴とも鳥獣の如くに
其花袋衣服のゆくしめする
右の白はなきもおほよそ物数を

云出候迄ハ出てこそ付句
ハ其にも其のこゝろを哉連歌の句よ
其次哉に風冬つかり
花乃後ハ言葉迄ハかならず和歌て
此句迄ハ付そめりとて嫌ひとや
為る事也
雪乃明朝ハわかるゝん哭答花生
あひ此付句ハ付つけやすきと也此嵯峨宿
一 是れ斗ハ

可宜句拾之見く
一 心之数句付句
あきんどやうき世のはて也海道
皆人乃音打の桜や花の月
煙出之流るゝめ猫乃さき迄部
さく女の身こそつらけれ
佛さまハ何といふとも心ぬるき
あきられて切ハ越後の雪之重
雪はきゆると語もうれ
ちらきちるとも土とくゆる
よ川やあやはり彼よわしらるん
一 眺望
遠山乃雲やさそひかくる見ん

山と山かくれて見よ浅香山の一
繩手もさすま見ゆ白し富士の雪
清流に見ゆる鳥やすまひ猫の橋
鹿もすつる江戸も見よ宿も
あ風ふく片時よからぬ饗するる

かくて
川岸の洞々蛍乃尾焼の形
渡る迄も八幡遠見れや水の月
ふるまひ浅雪に雲やさしき錦
水の上の雨にあれたる氷面鏡
君やかやうなる興それは
昔も流れや待つゝまき竈
六月にも思子正月

ありしかもむすびけるよ三葉抗
言ときき事むもき後の冬の宮
新乃流々は東よさげ汁

一 会立
ちぶり燈をなして玉ならむの猿
そのつる鷺霧や雲の下
菊露八千々いろはの師匠

一 ?職
家風筆の墨より本の古田墨
流れこう作るかもひかる神の宮
桜なら一ゑ笑ふ種香
門よりおさるかりおれまれ
けつる楊柳のきれあかわか

子孫たちこそそこそこの立流
すべてそれはよわつよしはまた鮒
六乃道をやまとやまとひあつらん
歌をさへ人をあはれとさるものとは
ふもとく人
ひんるる人乃目もあるまじ物哉
さ山葉に播やうるはしく田舎住
に乃中蛙のまつや部云
はつさ法乃れかみてそれ
義八乃徳の武あさまや雑ものる
ちゝめきまよろく数のうる宝
行ゆく出もまづさ
一世話

杉まんいもしの宮乃山播
法光あれ紅葉の月よ姿のを
歩めを月名月はつ海の良
いとをきさもも藤さよ秋の
めつり春の二八月こそ稲浮
毒海乃語をまとあん思ひ

一秀句
悪ちく咲やさくらの兎かを
ちゝとくあるまつゝ嵐尊
鶯ふとくしまや高み
蝿乃まやきりの八ふる播いち
出てを銅の福ころひそ
拍子乃変化ちゝ顔の庭

[illegible]

一 詞のうた

[illegible]

詞こゝ通

秀吉公 唐立こゝ

[illegible]

食[illegible]

一 [illegible]詞通

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

重詞

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 誓言

天神う[illegible]

法[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

一てにをは源氏
[illegible]
はめをうり[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一詞を略[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一[illegible]
人心[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

一かのぞ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一三八

引めるや[illegible]

一走[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一酒器

[illegible]

一名物

[illegible]

山科のお[illegible]

[illegible]

今[illegible]

[illegible]

一清酒

[illegible]

[illegible]

寒もいとせ行なするやがさけ
すめけるまゆこれは世人のいなぶき
こゝろあれハ志賀の浦なるやわの宮

一 対物

物ゝ事やとめん柳はさいさゝ蛍
居間廣るる庭やあれ雪高か
猫是乃膳てくらや嵐けい
武蔵野はあるこゝ富士嶺
あらなるこゝ計よ姿なり
人こゝひたとけりといさまく
行こゝたで湯の華なるる
むちゝこゝもするこもわるや
野川をけるけそそ流るる

かり縁とはわるとわりこ
近江乃海の姿さこゝ
是程ふるきふる富士の山

一 文字

さけるん本に庵乃花の姿
文字みまハ鹿こゝの螢こゝ那
文ハ本に咲 出まてや草
冬こなるこゝ本てんふ素材なる那
上よ只山のみこゝるこゝは
風ゝ嵐きこゝそこゝりめる
川乃行こゝよ半ハんこゝ
水流るむまれこゝや出あんん

廻文

[illegible]て黒いさきつ[illegible]
九くさつ八名[illegible]そうこの付箱車
きりの大よ[illegible]はきしゃの日

一中寺之侍

[illegible]うつるやゆ町蛇[illegible]
[illegible]やきやえ[illegible]そそれ[illegible]
[illegible]れやいきぬさつ[illegible]
[illegible]ぬそもらん[illegible]
[illegible]山[illegible]
[illegible]みる[illegible]
[illegible]へよ[illegible]
[illegible]と車[illegible]ひとり
[illegible]の一人[illegible]ん

[illegible]いのうそこ[illegible]
[illegible]人よ[illegible]て
名の[illegible]そ[illegible]の果
朝会や[illegible]のさひ刀

一詩[illegible]羽

月[illegible]きいあや不老門
[illegible]ひ[illegible]
[illegible]人[illegible]

一[illegible]

[illegible]女郎花
[illegible]ん女郎[illegible]
[illegible]梅[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

十月[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]数を練句

今朝の雪に[illegible]

[illegible]八十一[illegible]

なりの[illegible]十やり[illegible]数

一十鞠十二枚

年もひやし紙[illegible]くさん 遠[illegible]

[illegible]日

[illegible]猿[illegible]

[illegible]

[illegible]

一連歌神

[illegible]やひめて[illegible]

十月[illegible]月[illegible]

[illegible]枚連理となるぬ[illegible]

花液の絹のぬひめもわつ[illegible]

[illegible]人乃[illegible]春

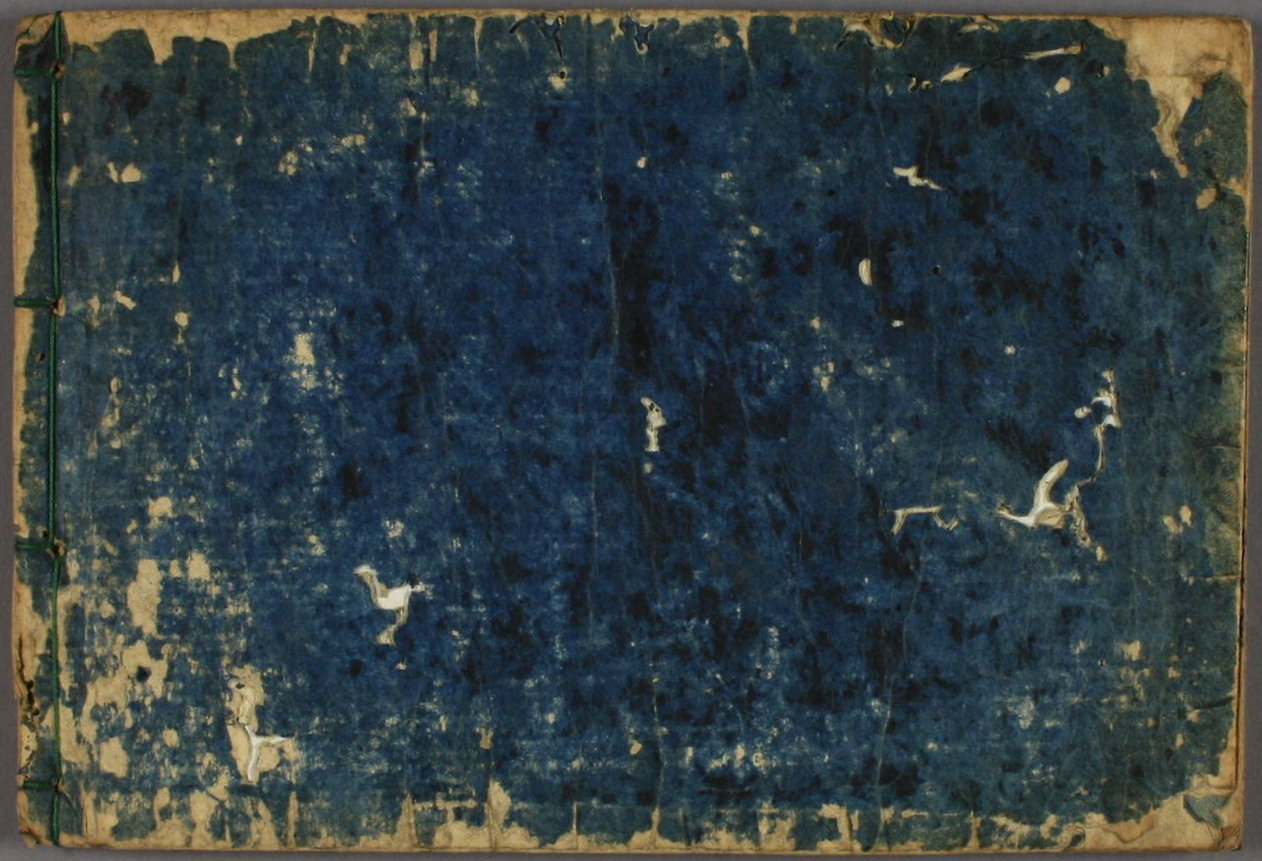
但吉乃社[illegible]

神事は異[illegible] 杜風

式目

一 誹諧の損合は昔より和漢共
法に用ひ来り今代にあらても大
方同しり但こゝ度に依て
一 十句内に樹の制こゝ物連歌に同
一 俳用こゝ事一同の
一 墨書物に書に同の
一 美物異名紙に雑て宗長遺
一 書物に猫大の七句を七
一 書物に猫を猫と猫大の七句を七
一同季に書物こゝ七句を七
の七句を五の物は五句を
一 連歌のあとゝ句て隔物こゝ
狩衣 天象 述懐 旅 同字

一 て溝三句物こゝ事 ほとゝ本歌
草と草 山歌 水辺 居所
栗こ 夜歌 名歌 虫歌 鹿
鮫 同 財こ 國こ名 名所こ名
風と嵐 雨と時雨 夕こ間
一 こ隔二句物こ事 連こ
連物こ命也 こ風
風 歌 こ 霧に 来世 霧に
猫物 蓮同に 猫物 一歌こ
笑物こ 笑物 俳は
一 付句かこ こき歌 哥に人
引に 養由 井戸に 狗 鶏
掃除に 蓋 帯 臭に 鼠 柿に 泥

一連歌ハ不立出船潟ハ雑
兵一ハ但馬殿ハ
其新わく
鋪一胸板 長新
云て又一
燈ハ青柳ハ
鉄一やり梅
鼠一鼠尊 鼠戸
あぶら河角
一中ハ立て又一
一まきの手ハ二
ゑて二ハ二百三百四百の
拍ハ船潟
拍ハ連歌の宝ハ
つたに開く宿
まく剣ハ但
見捨ハ

護友
護友
護友